

MT-141 の臨床使用経験

深 谷 一 太

横浜通信病院内科

新しいセフェム系抗生物質 MT-141 を 2 例の慢性気管支炎急性増悪の患者に用い、1 例有効、1 例やや有効の成績を得た。副作用を認めなかった。

MT-141 は明治製菓研究所において開発された新しいセフェム系抗生物質で、メトキシ基を有し、不活化酵素に耐性であり、広域スペクトルを有し、bulge 形成による溶菌が速やかに発揮され、とくに動物実験における治療成績が優れていることが報告されている。

極めて少数例であるが、臨床使用例を経験したので報告する。

I. 成 績

症例 1 69 歳、女。

慢性気管支炎の急性増悪を来して入院した例に、本剤を 1 回 1g 宛 1 日 2 回、ソリタ T<sub>3</sub> 200 ml に溶解して、2 時間かけて点滴静注し、6 日間継続した。

臨床症状は順調に消退し、有効と判定した。起炎菌は

不明であった。副作用は認められなかった。検査値異常も認めなかった。

症例 2 68 歳、男。

8 年前悪性リンパ腫摘出を受けている患者で、約 1 か月前から背痛、咳、痰、起坐呼吸となり入院した。

ほとんど床上起居のみ可能にとどまり、尿道カテーテルを留置した。肋骨侵食像を広汎に認め、激しい疼痛を訴えるので、持続的硬膜外麻酔を行なった。

膿性痰が持続し、痰中よりインフルエンザ菌を検出したので、MT-141 1 回 1g 宛 1 日 2 回、ソリタ T<sub>3</sub> 100 ml に溶解し、60 分かけて点滴静注を 9 日間施行した。

原疾患が重症であり、咳、痰の改善はあまりはかばかしくなかったが、CRP は 5+ から 1+ へ好転して、起

Table 1 Clinical results with MT-141

Case	Infectious disease (Underlying disease)	Organisms isolated	Dose		Effect		Adverse effect
			Daily	Duration	Clinical	Bacteriological	
I. I. 69 y.o. F.	Acute exacerbation (chronic bronchitis)	Normal flora	1g×2	6 days	Good	Undetermined	None
N. S. 68 y.o. M.	Acute exacerbation (chronic bronchitis) (malignant lymphoma)	<i>H. influenzae</i>	1g×2	9 days	Fair	Eradicated	None

Table 2 Laboratory findings

Case	RBC (×10 <sup>4</sup> )	Hb (g/dl)	Ht (%)	WBC	E (%)	Th (×10 <sup>4</sup> )	CRP	GOT (u)	GPT (u)	Al-P (KAU)	LDH (u)	γ-GTP (mu/ml)	TP (g/dl)	B : before treatment A : after treatment		
														B	A	
1	B	392	11.6	36.5	3,800	13	31	—	12	4	6.5	280	6	6.4	B	A
	A	365	10.6	33	4,500	8	29	—	17	5	5.9	291	5	6.2		
2	B	272	9.5	26	7,200	1	19	5+	29	10	13.9	1,033	9	6.2	B	A
	A	259	8.9	26	8,900	2	26	1+	35	26	12.9	979	16	6.0		
Case	TB (mg/dl)	BUN (mg/dl)	Cr (mg/dl)	Na (mEq/l)	K (mEq/l)	Cl (mEq/l)	Urinalysis									
							Pr.	Su.	Uro.	Sediment						
										R.	W.	Cyl.				
1	B		11.7	0.9	145	5.2	114	±	—	±	1-5/1sf	1/1	—			
	A		11.4	0.9	144	4.9	112	—	—	±	1-5/1	1-5/1	—			
2	B	1.3	24.7	0.8	150	4.3	111	±	—	±	20-30/1	1-5/1	—			
	A	1.0	17.9	0.7	139	4.0	102	±	—	+	20-30/1	1-5/1	—			

炎菌とみなされたインフルエンザ菌は消失し、やや有効と判定した。

副作用と考えられる異常症状を認めなかった。検査値異常の出現もなかった。Table 1 にこの2例のまとめをあげ、Table 2 に臨床検査値の推移を示す。

## II. 考 察

ただ2例の臨床経験のみで、多くを語りえないが、既存のセファマイシン諸剤に匹敵する臨床成績を収めたと考えられる。日本化学療法学会新薬シンポジウムの内容からも<sup>1)</sup>、本剤の存在価値は充分あることがうかがわれる。

しかし、既存の多くのセフェム系抗生物質群の中から、一頭地を抜くような特色を認めるには至っていないと思われ、将来の検討にまつところであろう。

また、3位のチオメチルトetraゾール基に由来すると考えられている副作用についても、充分監視が必要であるが、7位側鎖に存在するアミノ酸が、アンタビユース様作用の発現を阻止するという報告もあり注目される。これも今後の問題であろう。

## 文 献

- 1) 第31回日本化学療法学会総会，新薬シンポジウム I。MT-141，大阪，1983

## CLINICAL STUDIES ON MT-141

KAZUFUTO FUKAYA

Yokohama Teishin Hospital

Department of Internal Medicine

A new cephem-group antibiotic, MT-141 was administered to two patients with acute exacerbation of chronic bronchitis.

The results was that one patient was judged as good, but another one was fair. No adverse effect was observed.